

■学位論文内容要旨

## スクールソーシャルワークにおける トラウマ・インフォームド・アプローチの可能性

澤田 佳代 (2017年度修了)

### 【問題意識と目的】

近年、アメリカのスクールソーシャルワーク（以下、SSW。）研究で「トラウマ・インフォームド・アプローチ（以下、TIA。）」が注目され始めている。経済的困難や虐待によるトラウマ（こころの傷つき）などの生きづらさをもつ子ども達に対し、スクールソーシャルワーカー（以下、SSWer。）が教育から期待されたのは、複雑な家庭環境の課題を、アウトリーチなど福祉的な手法で解決することであった。けれども家族の問題は多様で根深く、親子関係が変容するには時間がかかる。

虐待など小児期の逆境経験が、子ども達のその後の「生活」や「発達」、「社会的な自立」にネガティブな影響を与えることは指摘されてきた。しかしすべての子どもがこのような傷つきから回復しないわけではなく、人や社会との「関わり」によって豊かな成長を遂げていく子どももいる。

ヴァン・デア・コーク（2016）は「学校が本領を發揮すれば混沌とした世界の中で『安心の島』の役割を果たせる。」と学校のストレングスを強調した。しかし日本の学校において、いじめや児童虐待の増加等を背景とした生きづらさを抱える子どもに対し、そのトラウマを十分に理解した教育がおこなわれているとは言い難い。

国内においてスクールソーシャルワーク（以下、SSW）の視点からTIAを紹介したものはほとんどない。本研究はTIAを先行研究、文献より紹介し考察することに目的と意義を持つ。

### 【研究の方法】

国内、海外文献の先行研究よりTIAに関わる文献および研究論文、研究報告をCiNii Articles、PubMedより抽出し、引用、紹介する。文献については、学校におけるTIAを捉えるために、スーザン・E・クレイグの文献『トラウマ・センシティブ・スクール』（2015）を紹介する。

### 【各章の概要】

第一章「虐待によるトラウマ」では、トラウマをもつ子どもが示す臨床像として、架空事例を紹介した。そこから見えてくる子どもと周囲との「関わり」による互いの変化に注目するとともに、トラウマと関連の深い「複雑性トラウマ障害」と「発達性トラウマ障害」の概念について紹介し、虐待によるトラウマの特徴を以下の4点に整理した。

①虐待によるトラウマは、災害や事故のような単回性のトラウマとは別の症状を示す可能性があり、子どもの発達を阻害したり、発達障害に酷似した症状を引き起こすこと、②脳へのダメージから学習に大きな影響があること、③虐待事例においては早期発見と介入のみならず、その後の長期的な心理社会的支援が必要なこと、④学校における保護的環境と「関わり」の重要性、である。

第二章「トラウマ・インフォームド・アプローチに関する先行研究、報告より」では、アメリカにおいてTIAの主要概念として捉えられているHopperら及びSAMHSA（アメリカ連邦保健省薬物依存精神保健サー

ビス) の概念を紹介し、以下のような考察を行った。

①精神医療領域におけるTIAは、「権威主義からのパラダイムシフト」、「ストレングスモデル」「再受傷・二次受傷の予防」に期待と重要性をもつこと、②児童福祉領域における実証研究ではTIAによる「安全な組織的運営とシステム構築」、「子ども・親の主体的な心理社会的教育への参加」、「専門職の育成」が目指されること、③教育領域の研究においては、広くTIAの方法や理論を解説しつつ、「組織における共通基盤」としてのTIAへの期待が伺えた。

海外先行研究からは、SSWerによるTIAの研究を中心に紹介、考察した。その中の1人であるCrosbyは、家庭での安全性が確保出来ない時、学校までをマイクロレベルと捉えるTIA支援が必要であると述べている。Crosbyの論説からは、連携や協働のあり方について、マイクロからマクロレベルまで見通したTIAによる包括的支援が重要であることが考察された。

**第三章 「スーザン・E・クレイグ著『トラウマ・センシティブ・スクール コミュニティを学び、子どもの生活を変える K-5』から学校の実践を紐解く」**では、クレイグの文献を章ごとにまとめ紹介した。クレイグ(2016)は「トラウマは単に精神的、健康問題ではない。未解決のまま残っている教育問題である。この問題は、何千人もの子どもたちの学業成績を低下させる。」と主張し、神経科学の知見を学校、授業に生かす方法、管理者や教師ができることを中心に述べている。クレイグの段階的介入は教師やSSWerの役割を視覚的にあらわしている。段階的介入以外の構成要素からもTIAは単なるトラウマケアではなく、学校システム全体に働きかける包括的なアプローチであることが考察できた。

**第四章 「神経科学とトラウマ・インフォームド・アプローチ」**では、クレイグが主張したTIAの根拠となる神経科学の知見について他の文献および研究によって補足した。トラウマを持つ子どもたちの行動上の問題に対して情動を調整するために、トップダウン(社会的関与を行わせる)とボトムアップ(体の緊張を和らげる)

の取り組みを学校の授業や支援に統合していく必要があること、特にボトムアップの取り組みであるヨーガや音楽、ダンス、演劇などの効果検証が今後、重要であることが考察できた。

**終章 「トラウマ・インフォームド・アプローチとスクールソーシャルワーク」**では、SSWにおいてTIAはどのような可能性と展望をもつかについて、TIAの概念とSSW実践スタンダードの親和性を取り上げ考察した。

また、子どもたちがトラウマから回復して行くには、「関わり」による生活支援が重要であることを述べた。

TIAの活用によって、学校を「安全な島」に変えることで、虐待からの回復という困難な問題を解決する道筋が見えてきた。SSWerは子どもに関わる全ての人や機関とこの新しいアプローチを共有し、協働し、子どもの豊かな発達に資することが期待される。

## 【今後の課題】

本稿は一部の文献よりトラウマ・インフォームド・アプローチの概要を紹介したに過ぎず、文献検索の方法も狭く、偏りがあることは否めない。今後の課題として、①TIAの根拠をより幅広い文献研究によって蓄積すること、②学校のニーズを測り焦点を絞りながら、実践に統合していくこと、③学校における実証的な研究によって、TIAのさらなる根拠を示すことが必要である。そして学校、教師、SSWerがそこにどのように「関わる」のか、その効果測定に寄与できる研究を目指したい。

## 【主要引用文献・参考文献】

1. ベッセル・ヴァン・デア・コーク 柴田博之訳 杉山登志郎解説(2016)『身体はトラウマを記録する 脳・心・体のつながりと回復のための手法』紀伊國屋書店
2. Craig, SE (2016). *Trauma-Sensitive Schools: Learning Communities Transforming Children's Lives, K-5*. Teachers College Press.